

Title	歯科矯正治療が歯周疾患に及ぼす影響
Author(s)	松本, 光生
Citation	大阪大学, 1969, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29869
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・(本籍)	松 本 光 生 まつもとみつなり
学位の種類	歯 学 博 士
学位記番号	第 1729 号
学位授与の日付	昭 和 44 年 3 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	歯科矯正治療が歯周疾患に及ぼす影響
論文審査委員	(主査) 教 授 滝本 和男 (副査) 教 授 河村洋二郎 教 授 横溝 一郎

論 文 内 容 の 要 旨

咬合異常は歯周疾患の一因と考えられており、咬合異常を改善することが歯周疾患の予防、治療に有効であるといわれている。しかし、咬合異常の改善が歯周疾患の治療に有効であるとしても、その効果は症例によって差があり、この問題はなお十分あきらかにされていない。

一方、歯肉毛細血管の形態は歯肉の臨床的所見と密接な関係があり、歯肉炎や歯槽膿漏症のあるものには歯肉毛細血管係蹄の拡張や異常形態を示すものが多いことが広く認められている。

本研究は肉眼による歯肉臨床的所見と毛細血管顕微鏡写真による歯肉毛細血管の形態を観察することにより、まず、咬合異常の種類と歯周疾患との関係を検索し、ついで、矯正治療によって咬合異常を改善した場合に歯周疾患がどのように推移するかを検索したものである。

被験者は咬合異常を有する患者25名で、観察はこれら被験者の前歯において個々の歯の歯肉について行ない、歯肉臨床的所見の良好なもの121例、不良なもの166例、計287例を検査した。

観察時期は矯正治療前、動的治療終了時、矯正治療後で、これら3時期に歯肉臨床的所見ならびに歯肉毛細血管所見を観察した。

矯正治療前において、異常咬合の種類による歯肉状態の相違を検索した結果、対咬異常(対合歯との咬合関係の異常)の場合よりも位置異常(隣在歯との接触状態または位置的関係の異常)の場合に歯周疾患の割合が大であった。さらに、位置異常を空隙、唇側転位、舌側転位の3群に分けて、それぞれ位置正常群と比較した結果、空隙群では歯肉臨床的所見は有意差を認めなかったが、歯肉毛細血管所見では拡張有(係蹄頂直径が 20μ 以上のもの)、異常型(主としてComplex型がみられるもの)が多く有意差を認めた。唇側転位群、舌側転位群では歯肉臨床的所見の不良、歯肉毛細血管所見の拡張有、異常型が多く有意差を認めた。つぎに、PMA-Indexを参考とし、さらにレントゲン検査による歯槽骨の状態を加えて、歯肉臨床的所見の不良の程度を、軽度不良(炎症を歯間乳頭または歯肉縁

の一部のみに認めるもの), 中等度不良(炎症を歯肉縁全体に認めるもの), 高度不良(炎症が付着歯肉にまでおよんでいるもの), 不良で歯槽骨異常を伴うもの(歯肉の臨床的所見が不良であって, さらにレントゲン検査で歯槽骨に異常を認めるもの)に分類した。以上の分類にしたがって, 歯の位置異常の種類別に歯肉臨床的所見不良の程度を検索した結果, 唇側転位群には不良の程度の軽いものが多く, 舌側転位群には不良の程度の高いものが多かった。

位置異常の場合に矯正治療前に歯周疾患が多かったので, 位置異常の3群について位置正常群を対照として矯正治療に伴う歯肉臨床的所見および歯肉毛細血管所見の推移を検索した。位置正常群では歯肉臨床的所見, 歯肉毛細血管所見ともに治療前後でほとんど変わらず, 空隙群では歯肉臨床的所見は治療前後でほとんど変わらなかったが, 歯肉毛細血管所見は治療後には拡張有, 異常型が減少し, 位置正常群との間に有意差を認めなくなった。唇側転位群および舌側転位群では歯肉臨床的所見の不良, 歯肉毛細血管所見の拡張有, 異常型が減少し, 矯正治療後はいずれも位置正常群との間に有意差を認めなくなった。

つぎに, 矯正治療前の歯肉臨床的所見と歯肉に及ぼす矯正治療の効果との関係を検索した。矯正治療前に歯肉臨床的所見が軽度不良のものではもっとも効果が大きく, 治療後には約86%が良好となり, 以下, 不良の程度が高くなるにつれて良好となるものは減少し, 高度不良, 不良で歯槽骨異常を伴うものでは良好となるものは認められなかった。歯肉毛細血管所見の推移をみると拡張有, 異常型の減少は軽度不良のものでもっとも大きく, 以下, 不良の程度が高くなるにつれて歯肉毛細血管所見の改善の傾向は小さくなった。

ついで, 矯正治療前の歯の位置異常の種類および歯肉臨床的所見不良の程度別に矯正治療前, 動的治療終了時, 矯正治療後の歯肉臨床的所見の推移を検索した。空隙のものでは歯肉臨床的所見不良の程度に関係なく, 動的治療終了時に良好となったものは認められず, 矯正治療後に良好となったものも約13%で少なかった。唇側転位のものでは, 軽度不良の場合には約52%が動的治療終了時に良好となり, 矯正治療後は約97%が良好となったが, 中等度不良の場合には矯正治療後良好となったものは約26%で少なかった。舌側転位のものでは, 軽度不良の場合にはすべてが矯正治療後良好となり, 中等度不良の場合でも約85%が良好となった。

以上の結果, 異常咬合で歯周疾患を伴う場合, 歯肉状態に対する矯正治療の効果は歯周疾患の程度ならびに歯の位置異常の種類と関係があることが認められた。すなわち, 歯周疾患の程度が軽いものほど歯肉状態の改善の傾向が大きく, また, 歯の位置異常の種類別では舌側転位のもので改善の傾向がもっとも大きく, ついで唇側転位, 空隙の順であった。

論文の審査結果の要旨

本研究は歯科矯正治療が歯周疾患に及ぼす影響を, 毛細血管生態観察法を用いて研究したもので, 従来ほとんど行なわれなかった歯周疾患に対する咬合の改善の効果について重要な知見を得たものである。

よって本研究者は歯学博士の学位を得る資格があると認める。